



高校の修学旅行バスに添乗して町内をガイド

農業体験型観光。ホームステイのように農家に宿泊し、農作業もします。それを観光にしようというもの。社内では、中心的コーディネーターとして事業を進めています。都市生活者にとってうらやましいほど豊かな自然の恵み。これをスローライフ、グリーンツーリズムという事業モデルとして成功させたい。でもそんな取り組みは、今や全国あちこちに生まれています。その中で成功する秘訣は何か？ 足りないものは？ 答えのヒントは「地域再生」という仕掛け。でも具体的には？ その結果を求めて、今取り組みが始まっています。



4月から1年間の地域再生マネジャーに就任しました。総務省所管の

(財)地域総合整備財団(東京)が行っている「地域再生マネジャー事業」の推進役です。民間の事業モデルに資金支援し、マネジャー(統括管理者)が中心となって地域活性化を、というのが狙い。

町では平成17年度からこの事業の助成を受けました。観光活性化で地域を豊かに。2年間、民間シンクタンクの㈱エコシップ21(東京)が地域資源を生かした体験観光のメニュー作りをしてきました。

アイデアを練った多くの事業プランが出ました。今後、地元の事業として定着し、育つ必要があります。その取りまとめに期待がかかっています。

3年前から農業体験観光のコーディネート事業を始めていた企画力、実践力がマネジャー役として見込まれたのです。

兵庫県の中学校2校の修学旅行生約300人が、町内67戸の農家で農業体験した受け入れが始まりました。昨年は8校、約800人の生徒、今年は10校、約1000人に。町内はじめ近郊農家に受け入れ拡大しています。

◇

東京の雑誌社勤務時代、沖縄県以外の全国の農・漁村を4年間巡りました。

雨の日も風の日も、原付きバイク(50cc)で駆け巡り、雑誌購読の営業をしました。訪れた先の農家に上がり込んで農政批判、農業技術、農家の担い手問題など、話に熱が入りました。

「この経験、体験メニューを観光という商品ベースに高められないか？」。今ある出発点はここだったのです。

今、キーワードは「地元の達人」。 「こんなことができる、あんな技がある、と町の人が持っている知恵や技が、これからの東川らしさを作り上げることができるんです。そうなれば町の人が主人公になります」。

「地元の達人」の商品化。これがまちの最大の資源、ひいてはまちが活性化する仕掛けです。

「70歳、80歳のおばあちゃんが若い人並みの収入を上げているところがある。農業はおもしろい」と。そして「二期一会ではないつながりを」と展開を考えています。

グリーンツーリズムの可能性を講演発表(平成18年11月、上川地区農協青年部大会)



ラトビア交流館に同居しているアグリテック社事務所



兵庫県から農業体験に来た高校生(平成17年6月、宇佐見農園で)



冬には森の中のスノーモービルトレッキングが大人気(平成17年3月)



高橋はるみ知事も「まちかど会話」で来町。大阪の高校生と一緒に田植え(平成18年5月)

なかだ ひろやす 中田 浩康さん 2007(平成19)年地域再生マネジャー。体験観光プランニングアドバイザー兼コーディネーター (有)アグリテック企画営業部 / 進化台781-6 TEL82-3040

【プロフィール】 栃木県出身。31歳。東京農業大学生物産業学部(網走キャンパス)卒。卒業後、農業関係の月刊誌、書籍発行の(社)農山漁村文化協会(東京)で営業、取材職。その後、旭川のNPO(特定非営利活動)法人、旭川NPOサポートセンターで2年間活動。豊岡地区で地元商店街の地域通貨「COCO(ココ)」の試行実験に企画参加しました。その後、グリーンツーリズム運動の高まりに伴って、体験型観光の企画コーディネート会社として3年前町内に設立した(有)アグリテック(資本金300万円、井下佳和社長)に入社。高校生の修学旅行や教育旅行という農業体験型観光の企画・計画作り、コーディネートをしてきました。